

大学生離島シンポジウム 地域と教育のあり方を考える

レポート作成 環境情報学部2年永由裕大

1.活動報告

■ 活動日程：2014年2月11日－14日

■ 場所：鳥根県立隠岐島前高等学校

■ 参加者：大脇（責任者、早稲田大学）、長谷部葉子研究室学生（学部生4名）、他大学生（24人）、高校生、地元行政職員、報道メディア

2.活動目的

「大学生離島シンポジウム 地域と教育のあり方を考える」は、海士町出身者と長谷部葉子研究会口永良部島プロジェクト合同で開催する3泊4日のイベントである。鳥根県立隠岐島前高校での大学生による出前授業【夢探究】と、出前授業の参加大学生と現地の有志の方々と離島・地域・教育をテーマにディスカッションする【学生「島」論】の2つで構成される。

また出前授業【夢探究】は2回目の開催であり、高校生との活動を通じ、大学生が地域や教育について再考するきっかけ作りも目的としている。また、地域の課題や活動の意義をより重厚に知ってもらうために、離島・地域・教育をテーマにディスカッションする【学生「島」論】を行う。これにより、海士町をはじめとした学生が活動している地域の問題をシェアし、若者世代が求められる過疎地域に学生が関わっていくきっかけをつくるのが最終的な目標である。

3.活動の様子

■夢探究

「夢探究」では、大学生が行ってきた進路選択、活動、高校時代にすべきこと等を5分程度でプレゼンする。そして、同じように高校生も、今後の夢、なぜその夢なのか、そしてその夢を実現するためにすべきことについて5分程度プレゼンする。高校生に対し、大学生は質問し、生徒の想いを引き出しながら、抽象的だった高校生の意見をより具体的なものにしていくことができた。



夢を語る大学生（菊地）



高校生の話を聞く大学生（右：永由）



「夢探究」の説明をする大学生（大脇）

■学生【島】論

地域活性化における先端地域である海士町の取り組みと、海士町とは異なる内容で教育的アプローチを行っている長谷部研の口永良部島での活動を共有した。大学生同士の関わり合いの中で、島・地域での活動紹介を行い、それぞれの手法やアイデアを共有することができた。また「地域における学生の役割」について議論し、地域において本質的に自分たちが担うことのできることは何か、各地域で活躍する学生の視点から意見を集めることができた。



海士町についてのディスカッションの様子



海士町へのインターン者と関わる大学生



大学生同士では交流や議論が毎晩行われた

4.活動成果

夢探求

先生や親のように上下関係がはっきりしていない大学生だからこそできる成果をあげることができた。今回の出前授業での高校生との対話の中で、「先生には言えなかったのだけど…」「親にもまだ言えてないけれど…」と喋って話をしてくれる高校生が多くいた。これは私たち大学生が高校生にとって、上の存在ではあるけれど、でも身近に感じられる存在、つまりナナメの関係が築くことができているからできたことなのではないだろうか。将来の夢を聞くと、ほとんどの高校生が、「なんらかのカタチで海士町（島）に貢献したい」と答える点は印象的であった。

多くの大学生がこの活動に参加し、高校生へ個々に合ったフィードバックをすることで夢とそれを実現するためのアクションプランを具体化することができた。また大学進学への具体的なイメージを持たせることで学習意欲を向上させ、生徒一人ひとりに合った夢を描ける環境を整えることができた。高校生にとって、島では関わることでできない身近な将来モデルである大学生との関わりは、自己実現のための大きな刺激になっていた。

この島前高校での「夢探求」という取り組みと口永良部島プロジェクトは、目的は少し異なるものの、“教育”をツールに地域活性化に取り組むという根本的な部分では共通しているといえる。今後も双方の内容を実践的に共有することで、他地域にも応用可能な研修モデルの構築に寄与していきたい。

学生「島」論

今回参加した大学生は「キャリア教育」に興味があり、教師志望や教育関係の団体に所属している人たちが多かった。離島に初めて関わる学生達は、都市では体験することのできない「自然の豊かさ」「人と人とのつながりの豊かさ」を肌身で感じている。

大学生は海士町という離島に関わることにより、都市とは違う地域社会のあり方を捉え直した。海士町の役場の方々の「海士町の取り組み」の紹介や、町長さんとのディスカッションを通し、離島という小さな社会で行われている活動を理解することで、自分たちの日常との違いを感じ、日本の社会の実態の把握をしていた。また海士町へのＩターン者と夕食会をともにするなかで、大学生と立場の近い人たちが離島に飛び込んでいき、実際に行っている活動を説明していただくことは、学生達のこれからの将来により刺激を与えていた。海士町で行われている取り組みの影響は、実感値として観察しやすく、離島での体験によって、どこに問題があるのか、なぜそれが問題なのか、どうしたら解決できるのか等を考える機会がうまれており、今後の学習や思考に結びつけ、研究や活動を行っていきけるのではないだろうか。

活動終了後も大学生同士の交流が続いている。各自の属する団体の活動に参加し合うことや、定期的な食事会、イベントへの招待など、今回の活動に関わった大学生たちの強いつながりが生まれ、学生の各地域での活動・成果のシェアが行われている。

開催した高校側からも良い評価をいただき、「夢探求」については、次回開催も決定している。参加大学生も増え、海士町の活動を知ることや、「離島・地域・教育」をテーマに取り組む大学生同士の交流も継続的に行われる土台を作ることができたのではないだろうか。

5.最後に

『夢探求』『学生「島」論』を行うことにより、大学生が過疎地域の現状を知り、その体験・経験を踏まえながら自分たちのネットワークを広げ、活動できる、非常に継続性の高い形が実現できていた。また、大学生という立場だからこそ、今回の活動成果を生み出せたと感じた。この機会を活かし、海士町と口永良部島の活動がさらに躍進するよう、共々努力していきたい。

「大学生離島シンポジウム 地域と教育のあり方を考える」の活動を、「シンポジウム・研究ネットワークミーティング」基金の元無事行うことができました。心より感謝申し上げます。

